



ブックレビュー 天野みどり著『日本語構文の意味と類推拡張』

著者	三宅 知宏
雑誌名	東西南北：和光大学総合文化研究所年報
巻	2012
ページ	279-283
発行年	2012-03-19
URL	http://id.nii.ac.jp/1073/00001295/

天野みどり 著

『日本語構文の意味と類推拡張』

笠間書院／A5版並製238頁／2011年10月31日発行／
ISBN978-4-305-70563-1／2,800円（税別）



三宅知宏 鶴見大学文学部教授

例えば、次のような日本語の表現について、言語学を専門としていない一般の方はどのように感じるであろうか。

「何を文句を言っているの！」

相手を叱責（本書の用語では「とがめだて」）しているような文脈で、普通に使われる表現だと思われるのではないだろうか。

実は、日本語研究、特に文法の研究者からみると、このような表現はちょっと“困った”あるいは“やっかいな”もののなのである。なぜか。普通に使われる表現であるにもかかわらず、専門的な分析を行った場合、非文法的なものみなさざるを得ないからである。上の例のどこが非文法的かといえば、まず、“何を”と述語の“言う”が直接、対応していないということ、その結果、“何を”が文の中で果す役割が不明になっていることがあげられる。さらに、日本語には、一つの述語に対して「対格」（日本語では“～を”の形）は一つに限られるという、一般に「二重ヲ格制約」と呼ばれるものがあるが、上の例はこの制約にも違反しているということがある。この制約に反すると、次の右端の例のように、普通は不自然な表現になる。

OK英語を勉強する／OK英語の勉強をする／*英語を勉強をする

したがって、先の例は、一般の方には普通でも、文法研究者にとっては“普通ではない”のである。

このようなちょっと“やっかいな”表現に対する、文法研究者の態度は、従来、大きく二つあったと思われる。一つは、“普通ではない”のだから、研究の主要なテーマとみなさず、等閑視する、あるいは先送りすること、他の一つは、言語の構造的な側面の研究領域（本書の用語では「文法論」）ではなく、一般に「語用

論」と呼ばれる言語の使用に関する側面の研究領域に委ねてしまうこと、である。

この「語用論」という研究領域は、言語の構造や意味そのものよりもむしろ、言語がどのように使われるかという使用の側面に関心を持つことから、必然的に、「文脈」すなわち文が実際に発話される環境を考慮にいれた分析がなされることになる。一方、狭義の文法論は文脈を考慮せずとも分析可能なものに研究対象を限定するのが一般的である。一例を示そう。例えば、「ペン持ってる？」という文は、文字通りの意味としては「ペンを持っているかどうか」を質問しているだけなのに、特定の文脈では「ペンを貸して」という依頼の意味と解釈されることがあるのはなぜか、というようなことを分析するのは、この研究領域の仕事ということである。

先にあげたような“普通ではない”表現（本書の用語では「逸脱的特徴を持つ文」）に対する、本書の著者の態度は従来のもとは大きく異なる。無視することもなく、他の領域に追いやったりもしないのである。

本書の要旨を、誤解を恐れずに大胆に述べるなら、次のようになろう。

本書は、「逸脱的特徴を持つ文」を複数、取り上げ、それらをいくつかのタイプとしてまとめて記述した上で、語用論の成果を援用しつつ、文法論としての分析を試みたものである。

本書の分析のスタイルは、実際の使用例、言わば生きた例をデータとして豊富に示すことによって進めていくという非常に実証的なものである。結果として、本書は、言語現象の観察・記述と、その分析・説明とが高いレベルで共存しており、いわゆる「記述的研究」であると同時に、いわゆる「理論的研究」でもあるという稀有なものになっている。

本書の持つ意義、与える影響は大きいと言わざるを得ない。画期的という修飾がまさにふさわしいと思われる。その理由を、箇条的に言うと次のようになる。

- ・「逸脱的特徴を持つ」ということを、そこにこそ興味深い言語能力があらわれているという積極的な意味でとらえ、無視するどころか正面から研究対象とし、従来の研究にない、緻密な記述を行っている。
- ・「語用論」の知見を取り込むことにより、「文法論」の領域を広げ、「逸脱的特徴を持つ文」に対して、従来の研究にない、合理的な分析を示している。

上の二つめの点について、少しだけ注釈を加えておく。本書は「文法論」と「語用論」の接点に関する研究と言えるが、両者の安直な折衷、統合を図ったものではなく、まして両者の境界を曖昧にしようとするものでは決してない。本書の姿勢は、むしろ両者の境界を明確にしようとするものである。語用論的な観点を取り込んでいるが、本書はあくまで文法論の研究である。この点は重要なので、読み落としてはならないことだと考える。

なお、本書の研究対象となっている言語表現は、やみくもに集められたもので

はなく、一部例外はあるものの、基本的に次のような「対格」（日本語では“～を”の形）を内蔵する表現に限定されており、決して雑多ではない。

「やろうとするのを手を振った」／「リンゴを置いておいたのを取った」
／「豪雨の中を戦った」

この点からすると、本書は、題名にはあらわれていないものの、日本語の「対格」に関する研究という性格も持ち合わせている。日本語における「対格」の研究は、すでに相当数の蓄積があるが、本書のような、「逸脱的特徴」を持つものを積極的に取り上げるという方略で、「対格」を分析しようとしたものは皆無と言ってよい。その意味でも画期的である。

専門的な議論になるため、詳細な説明は避けなければならないが、本書における「構文」という概念について、簡単にふれておきたい。

「構文」という用語は、一般の方でも、例えば「分詞構文」のように、英語の授業などで耳にされたことがあるのではないだろうか。その場合の「構文」は、形態的、意味的に類似の表現をまとめてグループ化しただけのものである。言わば、学習上（教師から見れば教育上）の便宜のためのものであり、「構文」自体が何らかの単位となっているわけではない。研究者においても事情は大きくは変わらない。「受動構文」や「使役構文」等、研究者が用いる「～構文」も、研究上の便宜として設定されていることがほとんどである。

これに対し、「構文」をもっと積極的な意味で用いようとする、言語研究の立場がある。その場合の「構文」は、ひとまとまりの形式と特定の意味とが結びついたもの、というような意味であり、言語的に意味を持つ一つの単位としての性質を持つものである。もう少し説明しよう。一般に、複数の構成要素から成り立っている言語形式の意味は、それぞれの構成要素の意味の総和によって得られるが、慣用句（イディオム）などのように、それが不可能なものも存在する。

石鹸で足を洗った／悪の組織から足を洗った

上の右側のような慣用句としての意味は、部分（構成要素）の意味を足し算しても決して得られず、「足を洗う」というひとまとまりの形式と結びついた意味と考えざるを得ない。このような、全体の意味が部分の意味の総和に還元できない、したがって一つの言語単位となる、形式と意味との結びつきを「構文」と呼ぼうとするのである。これは慣用句などに限定されない。言語表現一般に、特定の「型」と特定の意味との対応関係がある場合、すべて「構文」ということになる。

このような「構文」を、一般的なものとは区別して、仮に『構文』と表記することになると、本書は、まさに『構文』に基づく分析がなされたものと言える。詳細を述べる余裕がないのが残念だが、『構文』に基づき、そして「語用論」の知

見を援用することにより、本書は、先に示したような「逸脱的特徴を持つ文」に対し、自然で、合理的な分析を可能にしたのである。

したがって本書は、日本語をデータとした、本格的な『構文』研究の書と言うこともできる。しかも扱われているデータは、従来の『構文』研究でほとんど見られないものばかりである。この点で、本書の成果は、日本語研究者だけではなく、広く一般言語学の研究者にも共有されるべきものだと考える。特に、全体の意味は必ずしも部分の意味の総和に還元できない、という仮説をとる「認知言語学」と呼ばれるアプローチをとる研究者には強い関心を持たれると思われる。

本書の題名（『日本語構文の意味と類推拡張』）に見られる「構文」は『構文』として理解すべきものである。

すでに述べてきたように、本書には、記述的にも理論的にも、非常に斬新で刺激的な研究が示されている。それは、従来の学説を十分にふまえながらも、本書独自の定義に基づいて用いられる概念が複数、存在するという点にも表れている。そうであるがゆえに、本書において極めて重要な働きをする「推論」や「拡張」、そして「構文」といった概念に関して、その妥当性をめぐって、私見を交えつつ論じてみたいと強く思われる。しかしそれは、残念ながら本稿の責務を超える。学会誌などの専門的な学術誌における書評論文に託すことにしたい。

ここでは、最後に、学会誌などの書評では許されない、いくぶん印象批評的なことを述べておこうと思う。

繰り返すが、本書は極めて高度な研究書である。ところが驚くべきことに、本書は同時に“啓蒙書”としての性格もあわせ持っていると言えるのである。もちろん本書は、同じ著者による『学びのエクササイズ 日本語文法』（ひつじ書房 2008）のような、ストレートな啓蒙書の類ではない。あくまで研究書（しかも高度な）である。にもかかわらず啓蒙的な面が見られるとはどういうことかという点、それは第一に、言語を観察し分析することの面白さを改めて味わわせてくれるという点にある。何よりも本書には、著者の鋭い観察眼に基づく、実に多くの発見がある。それらは、日常の無意識の裏にある規則性をあぶりだすという言語研究の醍醐味を示すのに十分なものである。

さらに、論述の巧みさという点である。本書は、その構成として、巻頭に全体の見取り図としての要旨が、巻末に全体のまとめとしての結論が、簡潔に記され、そして念入りに、各章ごとに、その章の要旨が冒頭に付されている。読者は迷うことなく論旨をたどることができる。また、難解と思われる概念、用語には、必ず丁寧な定義、説明が加えられている。このようなことは、簡単なように見えて、実際はなかなかできるものではない。

評者は、言語研究の初学者に対しても、本書を推薦することに全く躊躇しない。自信をもって薦める。言語研究の面白さを知ることだけでなく、言語研究の基本

的な方法を学ぶことができると思われるからである。

いずれにしても、本書が、多くの、幅広い読者を獲得するであろうことは間違いない。そして、そうでなければならぬと確信する。

[みやけ ともひろ]